

韓国のテノール歌手ペー・チェチョルさん(40)は4年前に甲状腺がんの手術で声を失った。ドイツの歌劇場と契約し、「いつかミラノ・スカラ座の舞台に」と夢見てスタートした矢先だった。医師には「もう歌えない」と宣告されたが、信仰を支えにリハビリを続け、コンサートを開くまでに回復した。「昔は自分のために歌っていた。今は人々とつながるために歌う」。いま、手術後初の全国コンサートツアーで日本を回っている。

(佐藤千晴)

少年時代に教会の聖歌隊で歌い始め、ソウルの音楽大学からイタリアのミラノへ留学、数々のコンクールで入賞、ドイツの歌劇場と契約。30代半ばまでの歩みは「順調すぎて怖いぐらいだった」。それが一転、絶望のどん底へ突き落とされた。

甲状腺は首の前部、声帯にも近い。ドイツでの手術前、医師から声には影響しないと説明されたが、病葉が大きく、声帯や横隔膜を支配する神経も切断。歌うことはおろか、話す声すら出せなくなった。

言祖父の代からプロテスタント信者の家庭に育ったペーさんは、神に救いを求めた。「どうぞ声をお返しください」。祈り続けるうち、神がこの経験で私に何を与えようとしているのかと問うようになった。

テノール歌手はオペラの花形だ。華やかな歌劇場を目指し、才能ある若者が世界中からイタリアに集まる。ペーさんは音楽コンクールに挑み続けた。注目されるために、そして、賞金で留学費用をまかなった。

「世界の頂点を目指す競争は厳しかったが、とても刺激的で楽しんでいた。

もいた。この声で観客を喜ばせたい、もっと大きな劇場で歌いたい、でも、心はどこか満たされていなかった。神に祈り続ける中で、それは自分のために歌っていたからだったと気づきました」

声を失っても、歌こそが神から与えられた才能だという思いは揺るがなかった。懸命に治療法を探した。やがて声帯の機能回復手術で有名な一色信彦・京都大名書教授の存在を知る。03年からペーさんの日本公演を手がける音楽プロデューサー・輪嶋東太郎さんの助力もあり、日本での手術を決断した。

06年4月に京都で手術を受けた。部分麻酔での手術中、声帯の調整を確かめるために、一色さんから突然「何か歌ってみて」と指示された。とっさに出てきたのは、少年時代から好きだった賛美歌「輝く日を仰ぐとき」だった。

手術は成功したが、ペーさんが期待したほど劇的には回復しなかった。全盛期のように歌おうとしても体は反応してくれない。焦った。落ち込んだ。そんな時はひたすら祈り続けた。やがて「たとえ何年かかっ

リハビリで回復「得たもの多い」



2008年12月、手術後初のコンサートで歌うペー・チェチョルさん＝東京・白寿ホール(ヴォイス・ファクトリイ提供)

ても神は必ず回復させてくださる」と、待つことに希望を見いだせるようになった。

翌年7月、手術後初めて人前で歌った。ドイツの韓国教会。賛美歌の途中で声が出なくなったが、ペーさんをかばうように会衆が声を合わせて一緒に歌い始めた。涙があふれた。

昨年7月、14年ぶりに帰国し、母校で音楽を教えた。学生に歌って見本を示せるまでには回復していなかったから、すべて言葉で説明した。やがて不思議なことが起きた。まひしていた横隔膜が動き出したのだ。学生と一緒にペーさんの体も音楽の基礎を学び直したかのようにだった。

「人々とつながり合い、支え合うために歌う」と素直に思えるようになった今、「人生は以前より美しい」と言う。言葉の裏にも、音楽に込められた思いも、より深く受け止められるようになった。

「声は失った。でも、得たものの方がずっと多かった」

この秋、日本で出版した自伝「奇跡の歌」(いのちのことは社)の冒頭に、ペーさんは聖書のこんな一節を掲げる。

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれでおなたのおきてを学びました」(詩篇119篇71節)

秋には賛美歌や歌曲のCDを録音、冬には小さなコンサートを開けるまでになった。音域も音量もビークの頃にはまだまだ及ばないが、ペーさんは今の状態を「新しい声」と呼んで慈しむ。「以前の声を取り戻そうとは思わない。1カ月前より、

きょうより、一歩でも前進し続けることに意味がある」

ペーさんが日本の5都市を回るコンサートを開始した10日。東京での最初の曲は、手術中に歌った賛美歌「輝く日を仰ぐとき」。大切な宝物をそっと差し出すように、言葉を音にのせて静かにホールに満たす。歌い手として新たな歩みが始まった。